自然を生かした「村づくり」について

―宮田村への提言―

1998 年 10 月 25 日

日本福祉大学地域づくりプロジェクト

はじめに　「提案」にあたって

宮田村は長野県上伊那郡に属し、北は伊那市、南は駒ヶ根市に接している。中央アルプの主峰駒ヶ岳の東に展開し、天竜川右岸に位置している。駒ヶ根市との市村境には太田切川が流れている。宮田村はめぐまれた自然条件のもとで、縄文前期遺跡である中越遺跡をはじめ、多くの歴史遺跡を有し、「延喜式」にも古代の「宮田駅」名が記されているように綿々と人間の生活の歴史が積み重ねられてきた村である。村の人口は約 8、200 人を数え、高齢化率は１７．４％（1995 年 4 月）を数えるものの、近年、人口増加の動きや 14 歳以下の人口の減少率が低下するなど注目すべき動きが見られる。

ここには、新しい農業政策の展開や産業活動、また住環境の整備などをはじめ環境対策の推進や福祉の充実、さらにさまざまな伝統的文化の保存と継承など、総合的な「村づくり」の活動が存在している事を示している。

言い換えれば、宮田村にはこうした豊かな自然、歴史を背景に、「村づくり」にかかわって、自治体、商工会、農協をはじめとしたさまざまな団体や広範な地域住民が参加するエネルギー、人的「資源」が存在する。こうした人々によって、さまざまな「村づくり」のあり方が研究され、さまざまな調査報告書、意識調査などの成果も残されている。私たちは、こうした「人」のエネルギー、これまで積み重ねられてきた成果を大切にし、発展させる事が重要だと考える。今回の私たちの提案は、その点では、これらすべての分野、集団、組織の活動の成果を網羅したものではないが、新たな大規模外部資本の導入によらない、地域の人たちが主体となり、地域のさまざまな「資源」、とくに自然と歴史、生活史料を活かす草の根からの「地域創造」の提案をめざしたものである。

村の多くの方々の援助をいただきながら、十分な成果を生み出せなかったが、この「提言」についてさらに多くの方々からご批判、ご教示をあおいで、最終報告をまとめてゆきたい。

新しい村づくりの基本軸

（１）「地域創造」の最大の「資源」である「自然遺産」を消費的に利用することなく、「保護」と「継承」を理念として活用し、一過性のものでなく、自然学習や自然体験、宮田村での生活経験を経て、新たな「自然の発見」や「歴史の発見」、「自己発見」につながる新しい形の農山村生活体験学習型の交流拠点をめざす。

（２）高齢者をふくめ、農林業関係者、産業界、地域住民、青年層、婦人層さらには子どもたちも参加した「村中総出」の村おこし、村づくりをめざす。

新しい村づくりには村のすべての資源を活かす、活用するシステム－村のあらゆる人的エネルギーが撚り合わされ、広がってゆくしくみ－が必要である。

（３）こうしたあらゆる自然、文化資源と人的資源を結び合わせてゆくためには、情報公

開と情報交流による新しい組識・人の情報ネットワークが必要である。広範な宮田村の住民が参加するホームページの作成・運用をはじめとして、地域の情報化に取組む必要がある。

提言　Ⅰ　「駒ヶ岳観光」の見直し

村の新たな活力を生み出してゆくために、村おこし事業の一つの重点事業は観光産業であり、村の観光事業にとって、最大の「資源」は駒ヶ岳・宝剣岳を中心とする中央アルプスの山岳地帯である。この山岳観光を国民の要求や関心にこたえ、さらに２１世紀に引き継ぐべき遺産としてまもるために、一層の工夫や努力が求められている。

（1）「自然をまもる村」のイメージを徹底し、村のイメージを高める。

①駒ヶ岳の自然・環境（水、大気、植生など）情報を観光客、旅行会社などに明らかにし、自然をまもるパンフレット、ミニニュース紙の発行、広報ビデオテープの作成など、キャンペーンを展開する。

②「農業体験館」に「駒ヶ岳自然学習館」を付設し、高山植物や棲息動物、森林、水系、地層、岩石などの自然紹介や「山」にかかわる生活史料などの展示を行う。

（2）駒ヶ岳観光の拠点を大田切川左岸に設け、新しい総合的な山岳・農山村観光、生活経験の多様な体験ルートを開拓する。

①駒ヶ根ＩＣから、農免道路→新太田切川橋、国道１５３号→太田切川橋を経て、太田切川左岸に至るバスルートを新設する。

②大田切川左岸にバス・ターミナルを設置する。バスターミナルは宮田村の水源地帯の保全を考慮し、新たな開発によらず、タカノ（株）南平工場、マルス工場の敷地の活用を基本とする。

③ターミナルにはアルプス観光案内所を設ける。

④アイドリング停止対策を兼ねて運転手等の休養スペースを確保する。

⑤バスターミナルに隣接して「花のアルプス・ガーデン」を開設する。これらの施設設置にあたっては当該地域の「開発」を最小限にとどめ、自然景観を生かした施設づくりをすすめる。

（3）グリーンツーリズム

①第一水源地帯に予定されている砂防堰堤、砂防講演に近接した森林帯に低利用価格の滞在型コテージを建設し、周辺ゾーンの森林浴、ハイキング、温泉保養などの多目的なツアーの拠点とする。

②飯田線以西で太田切川以北の地域は、北西部の山すそにいたるまで緩やかな勾配の続く田園地帯が広がっており、駒ヶ根橋から市街地まで、水田の道、果樹園の道、花の道など多彩なカントリーウオークが展開できる。またこの地帯には多くの蔵が現存しており、この有効活用も期待できる。
③中越地区の遺跡群については、文化財保護の徹底をすすめつつ、域内の公共施設を活用して史料展示、公開をはかり、歴史学習ゾーンとして整備する。
④主要道路にそって、農産物の「物産館」、野菜市、朝市などを開設する。

提言　Ⅱ　商店街の活性化のために

宮田村の総合計画にあるように、また全国的な諸調査によっても、商店街の活性化、にぎわいの確保が求められている。商店街振興についてもこれまでの施策のうえにたって、つぎのような提案を行いたい。

（1）「蔵群」の保全

かつての本陣は別に移築されたが、町割には、上、下伊那地域の他の市町村には見られない旧街道時代から続く蔵群が残り、独自の景観を形成している。この景観を保全しつつ、まちづくりに積極的に活かすべきである。
また、何らかの形で現在の村の原型となった旧街道を再現することが検討できないだろうか。

（2）新たな商店街の開発

①現在の商店街の構成から見て、提言Ⅰにあるような滞在型あるいは多目的の観光客誘致を可能にするためには（1）の景観を活かした新たな商店形成が必要である。

- 伊那谷の特産物店（宮田村だけでなく）
- ワインレストラン、オープンカフェ
- 健康食品、自然食品の店
- 民芸品ショップ、風と水を象徴するガラス工芸の店
- 「風の蔵」（宮崎作品の店-「風の谷のナウシカ」など）
- 「森の蔵」、「木の蔵」（ウッドショップ）、「水の蔵」

②町のミニミュージアムの建設
蔵群のうちで、所有者の協力を得て、民俗資料その他を展示する街角の小博物館を開設する。
③歩道を広げ、並木道をつくる。
再開発にあたって、緑の景観形成を重視する。シンボルとなる樹木（白樺など）を配置した歩道を設け、安全にゆったりとショッピングが楽しめる街をつくる。

④“水”をテーマにした市街地の小公園の池、掘割、水路を考慮すべきである。宮田村が緑の田園小都市、としてイメージを発展させるには市街地、道路の緑化計画の推進とともに、「水」のながれを商業地区に再現することがのぞましい。

④村と都市との交流

村からの情報発信を活性化し、とくに市民レベルの交流を重視する。とくに都市部において高まっている自然指向、森や水に対する関心を背景に、

⑤国際化の推進

海外の農山村と交流を行い、世界の農山村文化の交流拠点を創造する。とくにヨーロッパ各国、とくにドイツ、フランス、イタリアなどで展開されている「美しい農村」などからも学び、交流を強めたい。

（3）検討課題

こうした課題については行政のイニシャチブとともに、何よりも住民の主体的な参加が大切であることは論をまたない。そしてこの議論を発展させるためには、村づくりに関する総合的な調査が必要である。

①基礎調査

- 村の総合計画の基礎となる住民意識調査
- 観光会社その他村に関る企業の活動・意識調査
- 「蔵」の調査
- その他村の歴史史料、生活史料調査

②地元住民による開発計画の研究組識、地区別住民懇談会

③町並み保存のための研究会の組織

④商品開発チームの結成

提言　Ⅲ　村づくりとイベント

（1）宮田高原の「風まつり」を地域に根ざした新しいタイプのイベントとして発展させる。

①「風」をテーマにした音楽祭を引き続き発展させる。

②地域の文化創造を支援する位置づけを持ったイベント

（2）流木彫刻フェスティバルの開催

①大田切川の流木を素材に。

②いわゆる彫刻作品のほか、インテリアなども対象とする。

③作品を「自然学習館」、「商店街」などで巡回展示する。

（3）農業体験、山村体験ツアー

①「こまゆき荘」や「滞在型宿泊施設」を拠点にして、商店街にいたる農村生活体験ツアーコースを設定する。（医療機関・連絡ポイントも明記）

・花の道

・ハーブの道

・果樹園の道

・水田の道

②各地域の「蔵」を利用した村のミニ博物館、ボランティアによる「農村ガイド」とティーサービス

③自給的な村の食料生産物を研究し、広める。

（4）祇園祭りと写真コンテスト

村の最大の伝統文化である祇園祭りについて、村外の村出身者をはじめ、継続して紹介活動を行うようにしたい。祭りは人々の心のなかに生きている。

（5）キャラクターの活用

こうした「村」のイメージを広めてゆくために、例えば、「風の谷のナウシカ」、「ムーミン」、「赤毛のアン」、など自然と溶け合った親しみのあるのキャラクターの活用することも考えられるのではないだろうか。

提言　Ⅳ　情報化と村づくり

広範な住民が村づくりに参加し、特色ある宮田村をつくりあげてゆく上で、村の情報化を積極的にすすめてゆく。

（1）新しい情報ネットワークの構築

激しく変化する社会・経済情勢をとらえ、あわせてこれらに対応する住民の主体的な村づくりの事業参加を促進してゆく為、地区ごとの組織的な活動のうえに、情報収集と発信の新しいネットワークを構築する。

①各住民団体、組織、公共機関にパソコンを配置する。

（図書館、福祉センター、公民館や農協など）

②宮田小学校、中学校での情報教育を推進する。

③こうした生活拠点のネットワークに対し、生活密着型の情報提供を行うシステムを構築する。

④とくに、近年教育現場での子どもたちの生活・学習問題が社会問題化しているが、子どもたちと教師のさまざまな学習実践が村のネットワークの中で紹介され、子どもたちを、地域全体で守っていく、育ててゆく教育分野での情報風土を形成し

てゆく事が大切になっているし、そうした取り組みが一つの問題解決の可能性を示しているのではなかろうか。

（2）情報人材の育成

パソコンを配置するとともに、その情報拠点毎に村のホームページ運用管理メンバーを養成し、情報交流の担い手を育てる。

村主催の継続的な情報学習の機会の確保を始めとして、村はや商工会や各種住民団体、住民組織の情報学集を積極的に援助することが大切である。

またとくに、村内の企業に対し、社会貢献の一つとして、さまざまな情報活用能力を有するメンバーの協力を働きかけることも重要である。

（3）宮田村の公式ホームページの制作プロジェクトと運営委員会の設置

「村勢概要」的なホームページでなく、生きた情報交流と学習、バーチャル体験型の魅力あるページをめざす。

（図表等）

①大田川左岸の開発プラン及び宮田村ツアーコース図

②商店街の蔵群地図

（参考資料）

①「宮田村第３次総合計画後期計画」

②「むらまち交流と地域活性化」（持田紀治編・家の光協会・ 1995 年）

③「自立と共生の地域産業」（東海自治体問題研究所・ 1998 年）

④「小規模リゾートの情報戦略」（国土庁・ 1997 年）

⑤「構造改革下で新たに胎動する地域経済」（経済企画庁・ 1998 年）

後記

９８年度の新学期以後、私たちの学部では、長野県出身の学生が発起人となって、「村おこし」に関する実践的な学習、研究の組織が発足しました。地域経済、地方行財政など私たちが学ばなければならない課題、対象は多いのですが、研究会の議論ではまず、現実の問題を総体として捉えようとし、この間、研究会メンバーの出身地の「市町村概要」、「総合計画」、各種パンフレットなどを収集し、紹介しあう活動などを行ってきました。

また「地域づくり」の実践的な学習として、研究会以外の学生の協力を得て、半田市の「市民まつり」の事務局に参加し、都市におけるコミュニティーづくり、住民交流の実践的検証を探求する立場から、半田市民祭りの企画、組織、運営に参加してきました。夏休みをはさみ、宮田村調査と市民祭り準備を連携させ、宮田村をはじめ、木祖村、奈川村からは白樺、ナラ、楓など多種にわたる間伐材の提供を受けて、新しい都市における「祭り」の新しいかたちの萌芽を育てつつあります。

この成果はまだまだ端緒的ではありますが、この成果を生み出したものは学生自身の旺盛な探求心、学習意欲であり、かつこうした学生の意欲に応えて、合宿研究会に協力を惜しまれなかった矢田宮田村村長を始めとした村役場の方々、商工会、社会福祉協議会及び村民の方々の協力によるものです。各位にはこの場を借りて改めてお礼申しあげます。今後とも学生の学習、研究活動へのご支援をお願いしたいと存じます。（Ｔ）